～輝きの子育て～

音読のすすめ

入園、進級おめでとうございます。

この「輝きの子育て」は、園長の母（片野英子）と父（片野英司）が毎月交互に執筆しています。

英子は前園長であり、保育に造詣が深い専門家です。英司はコンピュータ関係の会社に勤め会社人間でしたので、保育、教育には携わったことはありません。

この欄では、子どもの教育、保育に関すること以外にも、その時、その時に感じたことを伝えていきたいと思っています。通常ですと４月は子育ての基本である躾について書いています。

「早寝、早起き、朝ごはん」が定番です。これは規則正しい習慣を目指したもので、全国でも運動がなされています。是非、やってほしい躾です。

今月は、この定番からはなれて昔から続いていた勉強法のひとつである「音読」について書いてみたいと思います。古き良き日本で行われていたが、今ではあまり行われていない勉強法です。

最近、小学校では「朝の読書習慣」が行われており、集中力が高まり、本から学ぶことが多くなり、授業の導入がうまくいくとの効果が表れているようです。これは、黙読で行われています。

私の小学校低学年の頃（１９４５年～１９５０年ぐらい）までは、戦前の教育も一部引きつがれており国語の時間は「音読」でした。教科書の語句の意味とか文章解釈などせず大きい声で全員で読んだり、指名された生徒が大きい声で読むだけでした。あとは漢字の読みと書きとりの勉強だけでした。

音読の良いところは、日本語の文章の力とか美しさとか、響きやリズムで文章を味わえることです。

解っても、解らなくても、とにかく音読する。江戸時代から終戦（１９４５年）までは文章を知る一番の方法として音読が採用されたのだと思います。読むプロセスと聞くプロセスを同時に行なうことにより、脳の異なる領域を活性化し、記憶力を強化する方法です。

昔、中国では、科挙という試験があり、これに合格しないと役人になれなかったのです。そのため、小さい時から家で「素読（そどく）」がなされていました。

日本でも江戸時代、藩校や寺小屋では「四書五経」や漢詩を小さいうちから素読でおぼえさせられました。意味が解ろうが解らなかろうが「覚えてしまえ」という教育でした。この方法は１９４５年の敗戦まで続いていました。選ばれたテキストをくり返しくり返し声に出して読むと暗記できてしまいます。体にしみ込んでしまいます。このことが、後々の人格形成に役立ったのではないかと思います。明治、大正、昭和の偉人はこの方法で生まれた人達です。

音読は、英語教育にも応用できます。斎藤孝氏（明治大学教授）の「からだを揺さぶる英語入門」で述べておられます。「まずは訳文をみて内容を頭に入れておく、意味が訳ってから、英文を読めばすっすと頭に入っていきます。声に出してくり返しくり返し読む、ただ暗記してしまう」

人生１００年時代といわれる今日、老人の間で音読が盛んです。本屋には音読用の教材が並んでいます。脳の活性化に役立つということです。報道によりますと、上皇后美智子様は「上皇様と朝食後、本を音読するのが「目標」とありました。仲睦まじく音読をされているお姿が目に浮かびます。

お子さんには寝る前に絵本を親が声を出して読んであげる。これにより子供には単語の意味、発音、抑揚が身につきます。本が読めるようになったら大きい声で音読させるのが良いと思います。

斎藤孝氏は、多くの良質な音読教材を出しています。是非、本屋に立ち寄り良質なテキストを見つけてください。

片野　英司